

「幸せリーグ」設立総会

平成25年6月5日（水）午後5時から、東京都荒川区内のホテルで「住民の幸福実感向上を目指す基礎自治体連合（通称「幸せリーグ」。以下、「リーグ」という。）」の設立総会が開催されました。

総会には、加入した全国52市区町村のうち、長久手市長をはじめ、北は北海道斜里町、南は佐賀県佐賀市まで、全国津々浦々42市区町村の首長らが出席しました。

総会の冒頭、リーグの発起人である西川太一郎荒川区長があいさつし、リーグ発足の経緯や想いを語りました。以下、要約して紹介します。

荒川区では、今から8年前の平成17年から荒川区民総幸福（グロス・アラカワ・ハピネス：GAH）の研究を開始しました。そのきっかけとなったのは、たまたまテレビで、国民総幸福（グロス・ナショナル・ハピネス（GNH）を唱えたヒマラヤ山麓の小国ブータンの特集番組を見たことでした。私は、常々経済的な成長＝豊かさや成長という方向性に疑問を抱いており、この番組を見て、「これだ！」と直感したのです。（※ブータンのGNHについては後述の月尾嘉男氏の講演を参照。）

すぐに若手職員によるプロジェクト・チームをつくり、翌年には職員3名をブータンに派遣しました。そして本格的に幸福度指標研究に取り組むため、平成21年には区の研究機関として荒川自治総合研究所をつくり、その研究成果を書籍として出版し、様々な場所で講演させていただくようになりました。

おかげをもちまして、国内外から200以上の団体視察を受け入れさせていただいていますが、一方でふと不安でたまらなくなることがあります。「我々の取り組みは果たして正しいのだろうか？」「独りよがりの取組になっていないだろうか？」

そうした気持ちが抑えられなくなった時、お付き合いのあったつくば市長と京丹後市長に相談したところ、「全国の自治体に呼び掛けて交流体をつくり、お互いの取り組みを紹介し、勉強し、政策を語ることで、参加した自治体間の足りない部分を互いに補完しあえばよいのではないか」ということで、お付き合いのあった自治体すべてにこれまで発刊した書籍を送り、リーグ参加を呼び掛けさせていただきました。

その結果、50を超える自治体の皆様にご参加いただけることとなり、まさかこれほど多くの参加があるとは思っていなかったもので、ただただ感謝するばかりです。

このように、全国から注目される荒川区のような自治体でも本当に正しいことをしているか悩まれており、これに50を超える自治体が参加したことは、いかに地方自治体が悩んでいるか、これまでの物差しでははかることのできない価値観にどう対処していくか、いかにして住民の幸福を実現していくか等々、一歩でも正解に近付きたいと思っているかを表しているのではないかという思いに駆られ、とても印象的でした。

その後、リーグ顧問の東京大学名誉教授で元総務省審議官の月尾嘉男氏から「幸福社会への巨大転換」と題した講演が行われました。以下、要約して紹介します。

1950年から現在までの世界の各種生産力を比較すると、人口は2.7倍、食肉や魚肉の摂取量は6.5倍、鉄の生産量は7.3倍、石油産出量は8.7倍、所得は4倍になった。これだけ物質的に豊かになれば、地球上の誰もが幸せのはずなのに、幸福度は途中までは上昇傾向になっていたが、なぜか現在は下降傾向になっている。

これは、富の分配の矛盾が原因。年間1千万人が餓死しているが、全世界70億人のうち、11億人が肥満である。

米国の例を見ると、この矛盾は特に顕著である。1日当たり150億円相当の食糧を廃棄しているが、一方で減量対策に120億円、肥満対策に260億円をそれぞれ費やしている。捨てるほど食糧があるのに、困っている人たちには行き渡らず、摂取しすぎて返って余分なお金を使っている。

また、人間の経済的な欲望には限りがない。1637年に世界初のバブル経済が起こり（チューリップ相場：トルコ産のチューリップの球根1株が高騰し、オランダアムステルダム的高级住宅街1戸の値段より高額で取引された。）、日本では1918年の米騒動、1929年の世界大恐慌、1987年のブラックマンデー、2005年の炭素相場など、欲望の果ての不幸を繰り返している。

1976年、前ブータン国王ジグミ・シンゲ・ワンチュクが20歳の時に「人々の幸福な生活を可能にする自然環境、精神文明、文化伝統、歴史遺産などをも破壊し、家族、友人、地域社会の絆までも犠牲にする経済成長は、人間の生活する国家の経済成長とは言わない」とし、「GNH（国民総幸福）はGDP（国内総生産）よりはるかに重要である」と提唱したが、当時はオイルショックからの回復期であり、あまり見向きされることなく時間が流れた。

しかしこの提唱は、その後も果てしなく経済至上主義が続き、破たんしていくことを繰り返すうちに、「もうモノやお金のみで幸せを判断する時代は過ぎ去った！」と多くの人々が気づいたことでがぜん注目されるようになった。今では、ブータンのGNHを端に発し、先進諸国が国民の心の豊かさをもたらす社会に向けて、指標化の研究を始め様々な政策を実行している。

そのような「幸せの国」ブータンであるが、実は幸せの国ではなくなりつつある。ここ数年で、市場経済の波が押し寄せ、テレビやインターネット、携帯電話が普及し、ある少女は「韓国に生まれたかった」、その親は「もっと勉強しなさい」、再び少女「もっと自由に生きたい」、と韓流ブームに踊らされ、日本と変わらぬ家族の光景になりつつある。

「知識」は他者との比較になり、それは欲望への追求となり、やがて悲劇を招く。老子曰く「吾唯足るを知る」。今を大切に生きて、ほどほどで満足することが肝要かと…。



「幸せリーグ」では、今後は実務者を中心に、各自治体が対等・平等の関係で交流が始まります。多種多様な自治体を実施する、独創的で興味深い取組がきっとたくさんあるはずです。

幸せを追求するあまり、他者と比較しすぎることにはブレーキをかけつつ、長久手にも参考になりそうな取組は貪欲に吸収していければと、今後のお付き合いが楽しみです。